

日本のプロサッカークラブにおける育成年代のチームとトップチームの一貫指導に関する研究
—鹿島アントラーズの事例研究—

A Study of the consistent instruction between the youth category and the top team in Japanese professional football clubs — a case study on Kashima Antlers —

1K09B103—5 島田 譲

指導教員 主査 堀野博幸先生 副査 石井昌幸 先生

【目的】

本研究では日本のプロサッカークラブの下部組織からトップチームにおいて、一貫指導がなされているのかを明らかにすることを目的とする。対象は長年Jリーグを牽引するクラブであり、かつその長い間選手やスタッフ、フロントを含めたクラブ全体が確固たるフィロソフィーを持ち続けている鹿島アントラーズとして事例研究を行う。

【方法】

1. 対象者

鹿島アントラーズの鈴木満強化部長と高島雄大育成部長を対象とした。

2. データ収集方法

強化部長の鈴木氏には主にトップチームやクラブ全体の話を、育成部長の高島さんには主に育成部門の話を伺った。質問項目は基幹的質問、追跡的質問、探索的質問の3種類の組み合わせにより構成した。

【結果】

トップチームと育成年代の指導における哲学の共通項と相違項が明らかになった。

共通項としては、「勝利への執念」「一体感・結束力」「プロ意識」「帰属意識」「ジーコの教え」「一貫性」が明らかになった。

「勝利への執念」と「一体感・結束力」については、二人の発話からも、チームとして持つ一番大きな哲学として指導を行っていることが分かった。「プロ意識」についてはジーコの影響もあり、プロの選手が持つべき自覚や責任を、またプロを目指す選手が持つべき自覚や責任を指導することで共通した。「帰属意識」についても、トップと育成では指導の方法は異なるが、チームに在籍することの誇りやクラブへの愛情を育成するという点で、両者共通していることが分かった。そしてこれらの鹿島アントラーズに根付く哲学の多くはジーコがクラブにもたらした哲学であり、それを現在でもクラブ全体が継承していることが分かった。また、「一貫性」について、現状では理想には届いていないが、目指す理想の形として、一貫性を強めるということがトップと育成で共通していると言える。

【考察】

1. 一貫性の認められた点

1)「勝利への執念」と「一体感・結束力」

プロである以上、常に勝利を追い求め、勝つために努力を惜しまないことや、そのために選手、スタッフ、フロントが一体となって結束して戦うことが鹿島アントラーズの哲学として確立し、継承され続けていることや育成にもそれが浸透していることが明らかになった。

2)「帰属意識」

トップチームでは「序列と競争のバランス」のとれた編成を行い、常にチームの戦力を適正に保ち続けることで、クラブへの帰属意識や愛着を持たせており、育成年代のチームではクラブのエンブレムのついたシャツや物を大事にすることや、カテゴリーごとの差別化によって帰属意識を高めようとしていることが分かった。二人の方法は違えど、帰属意識を高めることを一貫して指導の中で大切にしていることが示唆された。

3)「プロ意識」

トップではプロである選手に対して「プロ」とはどのようなもので、どうあるべきかを指導し、育成の選手にはプロを目指す人がどうあるべきかということを厳しく指導していることが分かった。

4)「ジーコの教え」

「勝利への執着」や「一体感・結束力」、「帰属意識」「プロ意識」など、ジーコはアントラーズというクラブ全体に今でも根付く多くの哲学をもたらしていることが分かる。トップでも育成でもジーコの教えが根付き、継承されていることが分かった。

2. 一貫性の認められなかった点

1)「ブラジル路線」と「サッカースタイル」

トップチームは長年ブラジル路線を継続してきており、外国人の助っ人や監督は全てブラジル人で、サッカースタイルもブラジルの伝統的なスタイルを継承し、そのスタイルに合う人材をスカウトしてきた。育成年代のチームではユースにブラジル人監督を招聘しているが、それはトップとの連携を目的としたものであり、サッカーのスタイルに関しても「臨機応変」に対応出来る選手の育成に力を入れている。

2)「世代交代」と「哲学の継承」

トップチームではアントラーズに根付く哲学を選手自身が次の世代に伝えるという形をとり、育成では哲学を持ったコーチやキャプテンシーを持った選手によって哲学の継承を行っているという違いが明らかになった。